

什の掟

NHKの今年の大河ドラマは、同志社大学を創立した新島襄の妻となった八重の生涯を描いた「八重の桜」という作品です。

今週の日曜日（1月6日）からスタートしましたが、前評判が高くご覧になった方も多いのではないのでしょうか。

会津藩は、幕末から明治にかけて、時代の転換という大きな渦に巻き込まれて行くのですが、その歴史は白虎隊の悲劇と相まって今に伝わっています。

私は、武士の社会が終わりを告げ近代化への道を歩み始めた明治維新、更には新島八重その人にも興味がありましたので、第1回の作品を見ました。ドラマそのものは、テンポが速く、今後の展開が楽しみです。私がドラマを見ていて面白いなと思ったのは「ならぬことはならぬ」というセリフが、随所に出てくることです。

「ならぬことはならぬ」は会津藩で伝えられて来た「什の掟」に出てくる言葉ですが、ドラマが終了した後、現在の福島市内の小学校で子ども達の「什の掟」を唱和している姿が映し出されていました。福島県内においては、「什の掟」は今も人口に膾炙している事が伺われます。

会津藩の「什の掟」というのは、子ども達が守るべきルールをまとめたもので、会津藩における教育の柱といっても良いと思います。

会津藩では、藩士の子は10歳になると日新館（テレビドラマにも登場しました）という藩校に入学しました。そして、それ以前の6歳から9歳の子ども達は区域ごとに10名を単位とするグループ（これを什という）に所属して、武士の子どもとしての心構えや礼儀などを学び、日新館への入学に備えたといわれています。

それぞれのグループ（什）では、什長である年長者に続いて年少の子ども達が「什の掟」を唱和するというのが日課だったようです。

「什の掟」の中身は、

- 一、年長者のいう事に背いてはなりません
- 一、年長者にはお辞儀をしなければなりません
- 一、うそをいうことはなりません
- 一、卑怯な振る舞いをしてはなりません
- 一、弱いものをいじめてはなりません
- 一、戸外で物を食べてはなりません
- 一、戸外で婦人と言葉を交えてはなりません

「ならぬことはならぬものです」

